



南九州における襖下張り文書剥がしワークショップでの市民参加について考える（〈小特集〉襖・屏風下張り文書の保全と活用：住民参加型事例を中心に）

山内，利秋

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 12:96-102

(Issue Date)

2020-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012605>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012605>



南九州における襖下張り文書剥がしワークショップ

での市民参加について考える

山内 利秋

はじめに

生涯学習施設で実施される古文書読解講座では、〈参加者年齢層が高い〉というイメージがあるのはどうだろうか。平日開催の時間的余裕に起因するものなのか、もしかしたら他の世代の参加者を（意識・無意識に）排除してしまっている傾向があるからなのか。そうであるとも、そうでないとも言えるのかもしれないが、ここからは様々な世代の心理的、認知・発達といった複合的な要因に理由を見出せるのではないかと考えている。他分野を広く見渡すと、自然史系博物館や現代美術館のワークショップには若年層、特に子供の参加が目立つ。こうし

た分野の施設でよくよく観察してみると、様々な世代の人々が各々の役割意識を持つて参加しているというのを読み取れる。

地域社会の歴史を幅広い・多様な人々に開かれたものとするために襖下張り剥がしは極めて重要な機会である。それは身体的な動作によつて「発見する」という体験と、時に部分的にでも歴史を「読み取る」体験を同時に経験でき、これらの体験をグループでの作業によつて共有化していく学習機会になつていくからに他ならない。

ここでは宮崎歴史資料ネットワークを中心に、さらに鹿児島歴史資料防災ネットワークの活動も含めて、襖下張り剥がしワークショップによつて目指す目的を述べていく。

何を目指すのか

文書という記録資料を確認・収集出来る点を別にすれば、襖下張り剥がしで最も重要であるのは襖という日本家屋において歴史的な（そして現在も使用されている）建具の存在や構造・機能を明らかにする事もあるが、むしろそれ以上に注目すべきは、剥離するという手法によって眼前にある人の身体よりわずかばかり大きな物体が短時間のうちに当初とは異なった様相に変化する状況を、実際に身体的な動作を伴って「剥離し」、確認出来る事にある。文章を読むには一定期間の習熟が必要であるにせよ、目の前に現れてくるのが自分の数世代前に及ぶ過去の時代に書かれた文字であり、さらに自分が現在住まい・関係していたりする土地に関する内容である。知っている地名や、人名が出てくればそれだけで興味関心も強くなってくるだろう。

市民参加を主とした襖下張り剥がしでは正確な文章の解釈を学習してもらうよりも、展示表現ではどうしてもシンプルさが目立ってしまう文書資料について、体験型ワークショップの持つ身体を通じた学び・理解を通して参加者の主体的な参加を促進する、プラスの側面を重視していくべきではないかと考える。よく知られたピアジェの発達段階説を援用するならば、「前操

作的思考期」（二〜七歳程度に相当）では子供はイメージや言語を通して象徴による思考が可能となるものの思考そのものは自己中心的で、論理的に考える事は難しいとする。「具体的操作期」（七〜十一・十二歳）では物を主たる対象として論理的な思考が可能となり、保存や推移律の理解、さらには時間や空間の概念も広がって脱中心化が行えるようになる。ただ、まだこれら操作活動は具体的な場面にしか適用出来ない。そして十一・十二歳以降の「形式的操作期」に入ると、子供は論理的な可能性の観点から思考可能となり、仮説検証や演繹的な思考も出来るようになるという（堀一九九二、五九―九二頁）。

例外はあるかもしれないし、教育活動をあまり定型化してしまうのは生涯学習の枠からは外れてしまうものの、学校教育での歴史科目が小学校高学年に設置されているように、物事の論理的变化を時間軸に沿って理解していく作業は小学校低学年あたりではまだ難しいのかもしれない。それよりも体験型を導入として、そこから理解を深化させてもらう道筋へ誘導していく方が堅実ではないだろうか。

襖下張り剥がしは、地表面を掘り下げて地下から全く異なった歴史的遺構を明らかにしていく考古学的な調査手法と類似している点がある。記録化を行う作業が層位単位であったり、料紙の新旧関係や位置関係が重要となってくるのは、特にそうしたイメージを喚起させるのかもしれない。そうしたことから、こ

の下張り剥がし作業を自治体の文化財保護担当者や学芸員に説明する際に、埋蔵文化財調査を経験した事のある人物に対しては新しい文化層から古い文化層へと作業を進める際に使う「層を下げる」や、遺構の新旧を表す「切り合い関係」といった考古学で使用する用語で説明すると理解が早い事に気付く。協働で作業を行う際の感覚の共有は、対象のある状態から別の状態へと移行させるプロセスを共有する（論理的に理解する）上で必要な作業となる。一方でジャーゴン（専門用語）の多用は様々な主体の参加を意識している場合にはかえって障壁として機能し易い。ここにワークショップにおける合意形成を意図した場合に求められる、ファシリテーターの裁量の重要性和い技量が求められる事に気付くのだ。

我々がこのワークショップを通じて常に目指しているのは、インクルーシブな機会と空間の確保である。宮崎県の県庁所在地、宮崎市のみやざきアートセンターという場合は、通称「ニシタチ」（橘通り西）と呼ばれる中心市街地に所在する旧銀行店舗をリノベーションした施設である。ミュージアムとして必須である収蔵機能を欠いている一方、多様な人々が立ち寄れる居場所として極めて有効に機能している。平日休日に限らず朝から夜まで木製遊具で小さな子供達が遊んでいる姿は、宮崎県内第一の繁華街というこの町の性格を示している。図書コーナーの座席を占める中高生の姿は、試験期間中の図書館のようでも

ある。

経緯と経過

宮崎歴史資料ネットワークが襖下張り剥がしワークショップを実施する契機となったのは、宮崎市内で二〇一六年三月に実施した明治十六（一八八三）年に建設された商家家屋建物の解体に伴って行った資料保全救済活動である。建物の所在した旧城ヶ崎地区（現在の宮崎市赤江地区内にある城ヶ崎から恒久町の一部）は日向灘にそそぐ大淀川河口近くに立地し、延岡藩・高鍋藩・飫肥藩そして薩摩藩の領地が流域に接している。上方から瀬戸内・豊後水道・大隅・薩摩等へとつながる日向国の海上交通の要所であった場所であり、水運を業とするいくつもの商家が軒を連ねていた。

安政七（一八六〇）年に日向沖で遭難した鶴神丸とその積荷を分析した若山浩章によると、損傷した船の残り荷には杉板・櫓木・下駄木・櫛木といった現在でも宮崎県で盛んな木材生産に関わる山産物のみならず、椎茸・木耳・紙・綿実・白砂糖・鶏卵など多様で、積載量も多かったという。こうした積荷は旧城ヶ崎地区で集約し、江戸・大阪などへ出荷されていた（若山一九九六、一〇一七頁）。明治期に入り、西南戦争で大きな被害を被りながらも城ヶ崎さらに沿岸部にあたる赤江地区全体は

商業のみならず、城ヶ崎俳壇に象徴される芸術文化方面でも大きな流れがあった。近代に入ってからもお文化の中心ともなり、優れた政治家をも輩出している。一時鹿児島県に併合されていた宮崎県の再置運動を展開した川越進はこの地区から輩出された。

大正期から昭和前期にかけては宮崎県内でもエスペラント運動が展開されたが、特にこの旧城ヶ崎地区に活動拠点が置かれていた。宮崎資料ネットが建物解体に伴って資料保全救済活動を行った崎村家からはエスペラント語の創始者ザメンホフの肖像画を確認し、この作品の赤外線撮影による署名調査から、川越進の息子でプロレタリア画家であった川越篤の作品である可能性が高い事を明らかにしている（山内・佐藤・深瀬・丹羽二〇一九、一三―一四頁）。こうした資料は地区内にはまだ多く眠っている可能性が高いと予測している。

この崎村家資料を活用して、二〇一六年七月に最初の企画『ワークショップ フスマを剥がして地域の歴史を知ろう』を開催し、その後も含めて宮崎県内で計三回、鹿児島県内で一回の同様のワークショップを実施した^①。これら一連のワークショップでファシリテーション・監修を担ったのが、杣木郁朗である。杣木は二〇〇七年に宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館での西南戦争に関わる企画展での襖文書の展示に際しボランティアスタッフ向け講演会を行ったが、この事がきっかけで同資料館

ボランティアスタッフから西都市に所在する家屋の明治期の襖の存在について情報提供を受け、存在を確認した。そして宮崎県立西都原考古博物館付設の古代生活体験館において、同博物館運営に関わる市民活動団体とボランティアスタッフの参加を得てこの襖の下張り剥がし・文書資料の整理作業を行っている（杣木二〇〇九、一〇〇―一〇九頁）。この時の段階で既に解体家屋の襖、市民の関与による下張り剥がしというその後の宮崎・鹿児島両資料ネットによるワークショップの根幹が形成されている^②。筆者を含め宮崎・鹿児島両資料ネットのメンバーは杣木の活動経験から学習した点が極めて多い。また、古代生活体験館での活動に参加した方々はみやざきアートセンターでのワークショップにも参加し、これまで歴史資料に触れた事のなかった後からの参加者が技術的な体験を得る上では指導役ともなった。

みやざきアートセンターや西都原考古博物館という場所の性格もあるが、ワークショップでの参加者の年齢層は小学校低学年から高齢者までと幅広い。一般に参加体験型のワークショップでは、参加者個々人なりの体験の仕方や解釈をある程度認めつつ、それを入り口として本質的な理解への導入とする事が目指される。子供から社会人までを含むが若年層は手を動かして「解体する」・「剥がす」という自らの行為によって対象を変形させ、普段目にする事のない古文書を発見する事に、驚きと喜



写真 お父さんと一緒に

びを得ているのが見て取れる。特に小学校高学年に満たない子供の多くは、発達段階から考えると「歴史」という概念を理解するには難しい側面があるものの、こうした体験活動でも積極的に参加している。

一方、高齢者の目的は剥離された文書に「何が書かれているのか」という、内容の読み取りに主眼が置かれているのがワークショップ中の行動や発言から理解出来る。話をうかがうと自分の先祖や近隣との関係、すなわち自分のアイデンティティとの関係性を求めようとしている事例が極めて多い。これはどんな世代であっても地域資料と関係する際には生じ得る感情なのかもしれないが、高齢者には強い傾向がある。特にアクティブシニア世代を過ぎた高齢者が望んでいるのは、これまでの自分の足跡を再確認し過去と現在の自分を統合しようとする心理的な要因に他ならない。過去を回顧する事は認知症やその予防に機能するという側面がある点は各地の博物館において回想法が普及してきた事により知られているが、こうした認知的側面への触発が高齢者のワークショップへの参加要因となっていると言えるだろう。高齢者にとつて自らに関係の深い地域社会の過去とは、自分が何故ここにいるのかを説明し、納得するためのツールでもあるのだ。

ただ気を付けなければならないのは、我々の行っている活動は学校教育のような定型的な学習活動ではないという点であ

る。各年齢段階での学習者への配慮は認めつつも、あくまでも個々人が自身の興味に応じて参加しているのだという生涯学習の基本的な考え方がベースにあるのは強調しておきたい。

毎回のオープンなワークショップでは、このように子供から高齢者まで様々な人々が参加している。特にこれまで歴史資料に触れるチャンスがなかったり敷居が高いと感じていた人々が「何をやっているのだろうか」と、のぞき見のように入ってきて少しだけ体験するというケースもよく見かける。みやぎきアートセンターは交通の便が良い事もあって、デイサービス利用者が職員に連れられてくる機会があるのだが、普通ならば少し垣間見るだけのはずなのに、活動を体験してみる積極的な姿勢もうかがえた。襖そのものは高齢者にとってはごく日常の暮らしの中にあつた風景を構成する要素である。そして襖の下張り剥がしを行う機会はそうなかったかもしれないが、障子を破った子供時代の体験・自分の子供達と一緒に破った張り替えの記憶を想い出すと言う。一度こうした反応を経験すると、襖下張り剥がしワークショップを地域の歴史資料を得るという目的と、その目的から来る作法の厳密さに終始してしまうのでは大変勿体ないとは思えないのだ。

課題

多様な人々の参加を目指すには、その一方で様々な配慮が必要となってくるのは当然である。安心安全や学習参加機会をいかに確保していくか。そしてわかりやすい言葉でいかに広い知識を伝えていくかといった、博物館をはじめ生涯学習分野に求められてきた要件がこのワークショップを遂行する際には毎回準備され、心がけられる課題でもある。

様々な配慮と学術的に裏付けられた広範な知識の伝達、そして多様な人々の参加を求めれば求める程、ワークショップを限られたメンバーで開催する事の限界を認識し、協働の重要性を実感している。宮崎・鹿児島二県の南九州の資料ネットの連携はこうした非災害時での活動を通じて、いざという時に発揮され得るものであるとも確信している。

まだまだこの企画を展開していく上での別の問題も存在している、例えば広く活動を周知化させる情報流通はなかなか難しい。苦勞してポスターを作成しても、地元新聞にイベント掲載をお願いしても、思ったように市民にはリーチしていない。中にはSNSで開催を知って駆け付けてきたという人もいるが、大都市圏と比べてそうした人は限られているようだ。

また、襖という資料に直接的な接触を行う体験型ワーク

ショップ型式の限界として、一度に関与する人数の限界がある。襖一点につき五名前後の人々が作業に取り掛かるとしても、作業スペースを考えると四点程度、二〇名程度の参加で満席となってしまう。また、それ以上一度に多くの襖にとりかかったとしても、一日の限られた時間の中で行える作業は途中で終わってしまうので、作業中途の点数が増えるとその間の資料管理が煩雑になってくる。襖を保全救済した当初は、襖という建具である事から一定の空間を占有するものの、それが本部から剥離される事によって利用空間が縮小され、紙資料として整理されるプロセスを提示出来るので、自治体に対して保管場所を確保する交渉を行う際に有利に働く。ところが完全に剥離し終わるまでには一定の期間がかかる事もあって、作業途中の襖はかえって保管に注意せざるを得ない。IPMの問題もあるので、博物館収蔵庫にはすぐさま収められる訳ではない。大学などでこの作業途中の襖を一時的に預かるとしても限りがあり、外部に保管場所を確保するための資金不足にも頭を悩ませている。この一時的な置き場に苦慮しているのも宮崎・鹿児島両資料ネットに共通している。さらに言うのなら新型コロナウイルスの感染拡大のような状況の発生は、実際の資料を複数人で扱い参加者のコミュニケーションを重要視するワークショップ形式の活動には大きな制限となっている。

このような様々な課題と向き合いつつも資料を守るという活

動とその重要性を周知し、多様な人々に参加して頂ける環境を構築して次の世代に伝えていきたい。

註

(1) みやざきアートセンターでの企画は筆者、西都原考古博物館での企画は永友良典氏・福田泰典氏（以上、宮崎歴史資料ネットワーク）。鹿児島での企画とファシリテーションは佐藤宏之氏（鹿児島歴史資料防災ネットワーク）。

(2) 朽木氏は京都造形芸術大学歴史遺産研究センターや歴史資料ネットワークの事例を活動の参考としたとの事（朽木氏談）。

参考文献

- 堀薫夫一九九二「発達課題とカリキュラム」『新・児童心理学講座13 学校教育と子ども』金子書房
- 朽木郁朗二〇〇九「西都市黒木家旧蔵襖文書の整理―襖の解体と下張り文書刎がし作業―」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第5号
- 若山浩章一九九六「安政7年（一八六〇）2月の鶴神丸遭難について」『研究会会報』No.88 宮崎県高等学校教育研究会水産部会・宮崎県立宮崎海洋高等学校
- 山内利秋・佐藤宏之・深瀬浩三・丹羽謙治二〇一九「報告…赤外線写真撮影によって確認されたプロレタリア画家川越篤のサイン―宮崎県での保全資料調査から―」『九州保健福祉大学博物館学年報』第8号

本稿はJSPS 科研費JP16H03475の助成を受けた研究成果である。